



到着した目的地は、一目視て言うと、色鮮やかだった。

蒼天の下、開けた草原の緑と、何よりも色が目に映える黄色い花々が夏の風に左右に揺れていた。

「ヒマワリですか……しかし、これは壮観ですね」

寺崎がハンカチで額の汗を拭いながら、晴れやかな声で言う。視通すと、遠くには港を横に備えた海岸線があり、夏の日差しをキラキラと弾いて、まぶしく光りの綾を作っている。

その様子を瞳に映し、雪絵も青と白光の模様がガラス細工が輝いているようだ、と柄にもなく思った。

しかし、遠方の海面の煌めきもさることながら、その前面にあって対等以上といえるほどに、広々とした土地に数多く群生し咲き乱れた向日葵の花々が目に映える。その色彩あふれて揺れる花は、夏そのモノというように、また太陽の光彩のように鮮烈に、視る者達の心を洗った。

「確かに、これはすごいな」

目の前に拓ける花々の黄色と緑に、雪絵も瞳と口を開いて見入った。

それは、この場に立つ他の侠たちも似たり寄ったりの印象で、皆がざわざわと揺れる向日葵の花頭のように朗らかにしゃべっていた。

そこに、持国が雪絵の傍らに来て、

「お嬢、先方に促してはどうですかね？ 皆、見蕩れるのはいいですが、暑さもありますし」

と進言してきた。

雪絵は、うーん、と唸ってから、「ま、仕方ないか」と自分の様々な感情を吹っ切るように中空を視ると、息を吸い込み、寺崎の方に歩いて行った。

「ありがとうな、紫恩。お嬢、あれで結構真面目な方だから、いい勉強になっ

たみたいだよ」

持国が、それでも表情が固くなってぎこちなく寺崎と会話する雪絵を遠目に視て、言う。横に立つ室泉は、少し笑って返した。

「いえ。自分もああいう風に、刀を振るうことの信義を見い出せていない時期がありましたから、それを人に諭してやれるくらいにはなったかと、少し照れくさいですね」

「お前ほどの奴が、あんまり謙遜するなよ。見た目もいいから妬まれちまうぞ」

「気をつけますよ」

ハハハ、と二人は軽く笑いあった。

「しかし、この生業、いつ果てるか分からないからこそ、機会があれば貪欲に知れる事は

知っておいた方が後腐れがない」

「そうだなあ」

今回の視察は、半刻ほど掛けて周辺を見回り、天の太陽が高くに差しかかる頃には、切り上げて引き返すという予定だった。今後、本格的に電波塔の建設工事が始まる前に、何度か周辺町会とも懇談会を設けたり、住民の意見を取り入れるべく直に会話して回ることも行う予定だ。しかし、今回はまだその前段階も前段階である。

そんなわけで、今日の予定を消化すべく、現地に到着した視察団一同は、ぞろぞろと向日葵の原を視て回り始めた。

開けた土地であり、現場周辺に庇のある小屋などはない。もっとも近い建物も、しばらく行った道沿いに民家が出始めるくらいだ。

寺崎と建設関係者は、ここを切り拓けば、仕事をするのにさほど周辺に迷惑も及ばないだろう、などといった簡単なことから、周辺からの資材の運搬経路と、その運搬に際しての迷惑配慮などを会話して、咲き乱れる向日葵の外周を歩く。それを、太陽と申し合わせたように放射状に開いた黄色い花卉の花々が、ゆらゆらと風に揺れ、見守っている。

第四章 太刀の四

「どうかな……」

と、雪絵がつぶやく。

「そうですね、あまり良くないですよね」

そう、持国が返す。

やっぱりそうだ、と雪絵は思う。

ここは向日葵の花が林立している地帯を除けば、あまりに開けている。これでは、工事の最中も、まして今日現在、仮にこれから敵といえる存在の襲撃があった際に、護るべき弱い者たちを防御するのに立ち回りが不利だ。

「これじゃあ、何も無い所で背中に堅気を置いていたら、数で四方から斬り込まれれば、それで堅気は殺られてしまう線が考えられるよ。厳しい立ち回りになる」

「はい、そうですね。となると、場所に恵まれるまでは退き付けつつの太刀回りになるってところでしょうかね」

「うん、そうだね。外務官邸に向かって元来た方向——虎ノ門方向に退いて、客人を護る班と、応戦をする班にしたり、というのが定石かな」

武俠たちの中心に立ち、そんな相談をする雪絵と持国たち隊長格の会話は、それで今回の護衛隊の各員にも任務の方針として伝える働きをもった。もし、仮にも今回の電波塔建設に反対という勢力が、視察に訪れている寺崎たち要人を襲いに来ても、そうやって応戦する算段ということである。無論、状況によってはそれを変更することも、定石であり算段のうちである。

持国は、雪絵が嫌いな相手への対応はともかく、武刃者としての考え方などはしっかりしていることに改めて安心する。

なんだかんだで、お嬢も姐さんについて経験をつんでいるって訳だよな、と。視察団の皆々の後続き、建設予定地を歩き回りながら、雪絵は何気なくつぶやく。

「しかし……電波塔ねえ。それって、この郷に必要なモノなのかな」

特に答えを求めていた訳でもなかったが、隣にいた持国は、

「それは、まず第一に、境界線上の町や組には、結構利益が大きいんですよ。

第四章 太刀の四

元々、電気が通っているのがこちら辺だけですから、それを更に西方に倣ってよいモノに出来るようで」

「.....それって、郷全体の.....ウチの組の得になるわけじゃないんじゃないの？」

「まあ、すぐにはそういう面もあるかもしれませんが、しかし長い目でみればそうとばかりでもない筈なんですよ。そこは、清家の組がよく分かっているんで、興味があったらあそこのお嬢に聞いてみてください」

「ふーん、憶えておく」

「それに、境界線と、あと東西の港付近というのは、物資の出入りが盛んなんです。この電波塔が出来ることの余波として、そこの開発が進んで行けば、より良くなれば、巡り巡って郷全体も潤いが出てもおかしくないんです」

「ああ、何だっけ.....、都市部だけが繁栄したりするのがあったよね。そういう、ここいら辺りばかりが豊かになって、郷全体は置き去りになったりしないのかな？」

「大概、そこをうまくやるのが、姐さんの治め方、腕の見せ所なんです。勿論、姐さんの采配ひとつじゃあないんですが、港と交易、商売事は赤空がお得意です。ウチら青刃も西方からの方々をシマ全体に取り持つ役目を果たしているし、それにまあ東西緊張の刃止めであり先兵だったりもして.....話が変わってるようですが、まあ、皆いてこそ、郷もシノギを回せて、良いように持っていけるんですよ」

「ふうん。そんなものなのかな.....」

頬に指を沿わせる思慮顔の雪絵に、持国は曖昧に笑う。

「みんな.....皆か。こういう事を訊いて笑わないで欲しいんだけど、じゃあ、堅気の衆とは、何を受け持っていたりするんだろう？ それぞれ商売なりの仕事があるのは解かるけれど、それだけなの？」

雪絵の疑問に、持国はなんの事は無い、と言った声音で答える。

「それだけです。そして、それだけでいいんです。堅気はそういう風に、当たり前前のことをしている。それでウチら武俠やスジモンは、ウチらの当たり前前を

第四章 太刀の四

する。そういう各々の領分の当たり前をすることで、郷が回ってるんで、それも、大事なんですよ」

ふんふん、と雪絵は小動物のように小刻みに頷く。

「だからこそ、堅気を護る必要がある……ということかもしれません。お互いがなくて、例えばスジモンだけで郷を回したら、きっとよっぽど戦国乱世みたいにくちゃぐちゃの治安の悪い世の中になってしまうかもしれないですから」

「それは、あからさまに弱い人らが難儀しそうだよね」

「ええ、昔から世の中が乱れて泣きをみるのは、弱い立場の民草と相場が決まっています。それにですね、まあこれはどこまで深刻な話かはあやふやなんですけど、そういう風に郷が乱れると、西方がこの郷を放置しないかもしれないという、そういう事情もあるんですよ」

「西方との事情……か。そういえば、春花さんもそういうような事を言っていたかな」

郷の内政に介入しようとする者たちもいる、という話だ。

「……西方とか、ところどころの組もそうだけれど、それって、勢力を拡げる目的で行っているということかな？ そんなにそれって、必要なのかな」

視線を宙に泳がせて、腕を組む雪絵。ふとその耳に、小さな笑い声が届く。

「む、何かしら、紫恩さん」

「いや、失礼。お嬢があんまりにも勉強熱心だったので」

「至らない身なものですからね。悪いかしら」

「いえ。いいことだと思いますよ。清家のお嬢も言っていましたよ。坂本のお嬢は吸収が速くて有望だから、自分も負けていけない、と」

「へえ、あの清家のお嬢は勝気だからな～、らしいわあ」

持国が楽しそうに笑った。

雪絵は、仁美がそんなことを言っていたのか、と口許が若干緩む。しかし、すぐに気を入れ換えて、これ幸いと話を室泉に振った。

「紫恩さんは、組がシノギを拡げることに理解があるの？」

「理解というか、それが概ねの組織に自然なことだ、ということですかね」

第四章 太刀の四

「成程。言われてみれば、歴史でも世界中にそういう国家の動きがあるね。国も、組織も、成長が必要だということかな」

「そうですね……」

不意に、応える室泉の声音がどこか尾が切れるようで、すっきりとしないモノになった。その様子に、雪絵は怪訝に思う。

「？ 何かあるの？」

お嬢、と室泉は彼女の方を向かずに言う。

「シノギを拵げること躍起になっている組は、どこかで人心を切り捨てがちになります。そういうところは、この郷にも昔から変わらず今もあります」

「……獅士堂は、春花さんは違うよ」

「はい。獅士堂は、心と想いを重んじる。しかし、そうではない組も、この郷には数多くあるということです」

「……………」

雪絵には、室泉の言わんとするところが、想像がつくようで、しかし彼の何がそれを言わしめるかまでは考え至らない。

しかし——と続いたその言葉が指し示す者たち。

「今日の場合、西方にもそういうところがあるかもしれない、ということかな」
室泉は答えない。

これは、雪絵も自分で言っていて、答えは『なくはない』であると理解できた。

人心を切り捨てる——心を重んじない者たち。

そんな者たちは、雪絵はそれを、心無いと思う。

そして、だからこそ、かつての自分のように、そうした組織は無為に命を散らす、善くないモノに捉えられた。

「詮無い話です……」

そう、室泉は肩をすくめてみせた。それに対して、確かに、と雪絵は小さく微笑んで返す。

心無い者が自陣の勢力を拵げようとしたならば、そこにあるのはそれにそぐ

第四章 太刀の四

わない者たちとの対立だ。現代の郷でも、そうして抗争に発展することは数多ある。そして、肝心なのは、武を以って戦う道の自分たち武俠は、そうした衝突を恐れていられない、ということだ。

相手がどういう在り方で、何を欲し、結果どういう衝突を招くことになったとしても、こちらとて自らの重んじるモノのために、毅然と刀を振るう。

結局は、それだけでいい。

それが、武俠の——スジモンの当たり前で、果たすべき領分で、通すべきスジだ。

ただ、それで傷を蒙るの堅気のことを無視はできない、というのも確かだが。「基本的な姿勢をしゃんとしていれば、即応できる、ということかしらね。それがどこのどんな者たちであったとしても」

「そうですね。……それに、そうしていることで専心し振るう刀が、武俠の誠に至る道かもしれません」

ん？ と雪絵は気がピンと立って、その言葉を敏感に拾い、反応する。思わず、風で髪がアンテナのように立ったように見える。

「武俠の誠……？」

それは、冬にも春花が口にしていた、

その時は、武俠の精神か、気構えだと雪絵は漠然と解釈したような気がする。襲ね菊の武俠が、『堅気を護る』 ことを、もしかしたら武俠の誠にしていたかもしれない、という春花の言葉を、その時はそんな風にした。

そうした——武俠の誠。

武俠の、というからには、あの襲ね菊の武俠ひとりのモノではなく、この郷のあまねく武俠の心にある精神的なモノなのだろうか、と雪絵は改めて考える。

そうして思う。それぞれの武俠が持つ、『武俠の誠』 とはなんだろう、と。

それぞれに違うのなら、皆はどういうモノを心に据えているのだろうか。それが知りたいと思った。

雪絵の好奇に輝く瞳を視て、室泉はキョトンと少年のような顔になった。しかし、面食らいつつも、年若い武俠に対して、おだやかに言う。

「お嬢も、武侠の誠について考えたことがありますか？」

「うん。考える機会があったし、考え込む時もあった気もする。けれど、正直よくわからない……。自分で答えを見つけるべきだとは思うのだけれど」

「そうですか……。けれど、そんな難しく考えることでもないですよ」

「そうかな。簡単なことじゃあない気がしているよ」

「確かに、簡単に為せることではないです」

『？』 と雪絵は室泉の顔を視る。

「簡単に為せないのに、難しく考える必要がない……。？」

ううん、と雪絵は頬に手を当てて首を傾げる。

そんな雪絵に、室泉は相変わらず短く言う。

「簡単に為せないならば、簡単にやらないと、心得ればいいんです、お嬢」

「……………？」

その言葉は謎かけのようで、頭の中に夏の入道雲のようなもうもうとした靄が掛かって、視界が悪くなるような気分が、雪絵はした。

しかし、自内証のこころを、と自らに考えることを止めない気持ちを奮い立たせる。

「簡単に為せない……。……難しくやる、ということ？」

時間を掛けてでもやる、かな？

黙ったまま、室泉は遠い浜風に流れる黒髪を視る。素直で、美しい艶の長い黒髪だ。それが風に戦ぐ。

「……………時間を掛けてやる……………やり続けるということかな。難しく考えず、やり続ける……」

ぶつぶつと、考え独りごちる雪絵を、室泉は尚見遣る。持国は、視察団について移動している護衛の武侠たちの背を視ている。

その男たちの背が、ビクリッ と震えた。

「あ！」

と、雪絵が大声をあげたのだ。

咄嗟のことで、周囲に大音声を響かせて、驚かせたことにバツの悪そうに口

に手を当てつつも雪絵は、

(あ～、あ～、そうか、そういうことか)

と、口を押えたまましきりに頷く。

持国は、仲間の武俠と使節団の皆に手を振ってなんでもないと、言い表す。

「お嬢？」

室泉と持国が、二人とも違う発音で言ってくる。

雪絵は思う——自分は、それを以前に書き記しておきながら、それらを結び付けて考えていなかった。……それに、今考えが及ぶ。

そうすることで、また繋がるモノがありつつも、今導き出せた答えを紡ぐ。

「要は、在り方なんだ……。武俠の誠とは、目指していく 『刀の在り方』 だ。そして、それは多くの武俠が簡単に為せない……。たゆまず、当たり前前に刀に生きて、そう在って、目指していくモノ……」

「お見事です、お嬢」

僅かに口許を緩やかにしている室泉と、うんうんと頷く持国。そして、雪絵は靄が晴れたような頭で、更に先にあるモノを視て、それを考える。

「武俠の誠が、自らの刀の在り方で、それを為し遂げることが簡単でないのなら、けれど……目指すべきカタチはあるものじゃないかな。一度、誰かに訊いてみたいと思っていたのだけれど、紫恩さんは、自分の刀で、こう……やりたいというか、カタチはある？」

「……………お嬢はあるんですね」

「……うん、あるよ」

頷いて、しかし、もどかしそうに若草色の柄の刀を持つ手を胸にやって、俯く。

「強いて口にすることはないです。口にするということでもないんですよ。お嬢」

さわさわと揺れる草花の横で、室泉は静かに言う。

「己の誠は、人に言ってきかせるモノではないです。自らの心の真ん中に、秘めてしゃんと立てれば、それでいいものです」

「秘める……。口にしなくても、自分が分かっていたら、それでいいというこ

とか」

じゃあ、室泉に問い、答えてもらうのは、不粋なマネだったか、と思い雪絵は小さく恥じる。

「至らないことを口にしました」

「いえ。皆……自分も、そんなところがあります。気にしないでください」

「そっか」 と息を吐き、雪絵は空を見上げる。

強く眩しい太陽に、青々とした空がさっきよりもさわやかに感じるのは、風が心地よさを出してくれているからだけでは、ないのかもしれない。

「刀は……、武俠は、己の我だけで人を斬っては、もしかしたら辿り着けないかもしれない、そんな果てにある 『境地』 があるのだと、自分は思います。武俠は、刀を手にしたその時から、いつしかそれを求める生き物なんでしょうね」

「紫恩さん……」

控え気味に話す彼にしては、少し饒舌なその言葉に、室泉紫恩という武俠が抱く刀への想いを垣間見る気が、雪絵はした。

そして、思う。

(辿り着くべき、『境地』 ……………)

境地。

それが、刀で在り方を以って、目指すべき地点——目標というモノなのだろう。

(私にとっての境地とは、きっと、あの日に魅た 『華』 だ。春花さんの為し、顕わす刀の、その美しさだ)

あの美しさを、自分の刀でも顕わすことが出来たら。

その境地に至れたら——。

そうしたら、私の胸の奥にある、無為だったモノや、無暗に失った命たちも、どうにかなるのだろうか。

自分の刀には、今の自分には、目指すべきモノがある。そう思うと、胸の奥がワクワクと内側から膨らむような、湧き上がる様な感じがして、叫びだした

いような衝動が起こる。

けれど、今さっき大声をあげてしまい、それを反省したからだろう、口から昂ぶりを出すことをどうにか堪える雪絵。そうすると、どうにも今度は顔の筋肉がゆるゆると、ふるふると揺らぎ、いつしかニヤついている自分に気づき、室泉と持国から顔を反らした。

（ふふっ これはなんだろう。顔が笑むのが止まらないし……。けれど、なんだか、春花さんと接して心が嬉しいのとも違う……。不思議だな）

こんな気持ちになる自分を不可思議に思い、そして考え至る。

（これも、今の私の刀の生き方を、あの日春花さんが見い出し、導いてくれたからこそ味わえる昂ぶりかな。春花さんには、感謝してもし足りない……）

ふふ、と声を出して笑う雪絵の瞼の裏には、春花の微笑む顔。亜麻色のゆるくうねった髪。優しい、厳しい手がうかぶ。

「お嬢」と持国が促す声に、今が仕事の真っ最中であることを思い出し、軽い陶酔から瞳を開く。風に揺れる向日葵が瞳に映る。その花開く様が、何か更に笑えた。

（何か、春花さんの笑顔のような花だ）

春花の笑顔が、向日葵のように自分を明るくさせるのだ、と雪絵は胸が温まる思いになる。

そんな風に、考えるともなく考えて、歩みを進め出す。

そして、花々が揺れる平地を見回す。周囲には、遮るモノはなく、道の先に視察団員を前後に挟むように護衛の武俠たちが歩いている。

後方から彼らに近づこうとして歩いて行くと、雪絵は視線が逸れるのを感じた。

寺崎が振り向き、後方の武俠と話をしている。その視線が、一瞬、雪絵と交差したのだ。

特に、何もない一瞬だった。しかし、胸躍るおもいだった雪絵は、その一瞬にして思い出す。この男が、春花と仲が良いことを。

男女が仲が良いということは、どういうことか。自分が好きな、憧れる……

自分を好きだと言ってくれる人が、男と仲良くしているということは、どういうことか。

今までなんとなく考えていたことが、網膜で相手を捉えて、昂ぶった今の雪絵の脳髄は、明晰にその事柄を思考し始める。

「……………」

気に入らない。

何か、と曖昧にいわず。はっきりと、気に入らないと思う。

(あの人、いなくなったらいいのに……)

その時の雪絵の頭は、自らの不快感に対して、短い経路でそんな暗い意思をはじき出させていた。

風が、ざわりと木立ちを揺らす。

……続く。